



< 心臓血管・呼吸器外科 >

概要

(1) 心臓血管外科

当科は、“心臓と血管にかかわること全て”を診療対象としています。外科系診療科ではありませんが、手術を必要とされる患者さんだけでなく、手術をせず投薬のみで治療をしている患者さんも、数多く診させていただいております。

疾患としては、先天性心疾患、心臓弁膜症、虚血性心疾患、大血管疾患、四肢末梢血管疾患、下肢静脈疾患、等が挙げられます。先天性心疾患については、乳児や小児はもちろんのこと、先天性心疾患を持ち、手術後あるいは手術なしで成人となられた方々も診させていただいております。

このように多岐にわたる疾患を対象としているため、患者さんの年齢幅は広く、また様々な合併症を有している方を観ることになります。当院は、各診療科にエキスパートが常勤され、気軽に相談できる環境が完備され、非常に心強く感じています。

(中山 雅人)

(2) 呼吸器外科

2011年1年間に行われた呼吸器外科領域の手術は、全身麻酔手術が177例、その中で診断目的を除き部分切除以上を行った原発性肺癌手術は82例で、昨年より20件の大幅な増加が見られました。

肺癌は依然として、全体の癌死因の第1位であり、年々増加の一途をたどっています。PET 検査や早期 CT 検査の普及で肺野異常陰影の質的診断能が向上し、早期発見される肺癌は確実に増えており、昨年手術適応症例では、完全治癒の見込める I 期の早期癌とされるものが70%も有り、早期に手術を行うことで治療効果が確実に上がってきています。一方、高性能 CT で肺野異常陰影の発見が容易になった反面、数ミリの微小病変も見つかるようになり、質的診断に大いに悩みつ、数年間にわたる経過観察の末に手術を施行した例も多くなりました。

近年では多くの領域(科)・施設で行われるようになった鏡視下手術の導入以来、嘗てのように大きな皮膚切開を置いて肺切除を行うことは少なくなりましたが、全ての症例に適応となるわけではなく、時として高度の胸膜癒着症例や進行肺癌等に対しては、鏡視下手術に比してや

や大きな開胸創を用いて安全な手術を心掛けています。しかし、開胸創が小さくなってきたことで、術後長期に亘る創部痛に悩まされることは少なくなり、入院期間の短縮に大いに貢献しています。現在、80歳以上の超高齢者とされる患者様にも、積極的に肺葉切除等の標準手術を施行していますが、手術前日の入院から退院まで、5日から7日間の入院治療が可能になっています。

また、早期発見・早期切除が可能な症例が増えてきたことで、進行が早く高頻度に再発を起こす肺癌症例でも完全切除が可能となり、生涯第2、第3の肺癌を術後経過観察中の早期に発見できることが時にあります。初回手術で肺葉切除を標準で行われていると、低肺機能のために2度目の手術を諦めざるを得ないこととなり、近年では早期肺癌に対して、根治切除を目指しつつ肺機能温存を図り、積極的に切除範囲を狭める“縮小手術”を行う機会が増えてきました。

このように早期に発見できれば長期生存可能な症例が増えてきていますが、定期健診を受けずに進行癌となって、症状が出てから来院されるケースもあり、その場合はすでにリンパ節や他臓器に転移していることも多く、手術が出来ても再発率が高くなります。

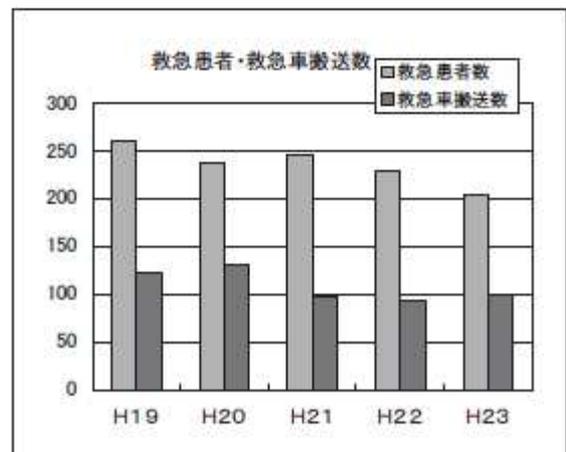
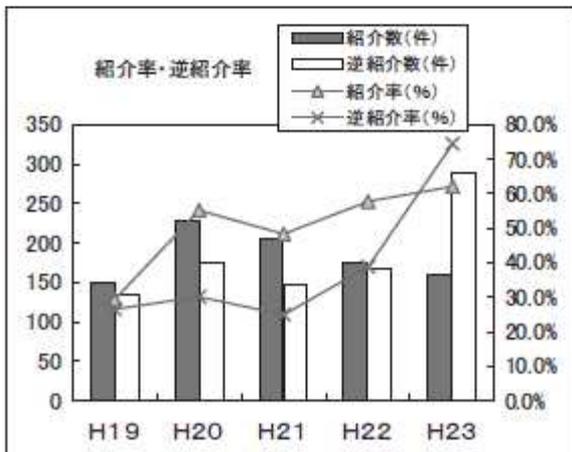
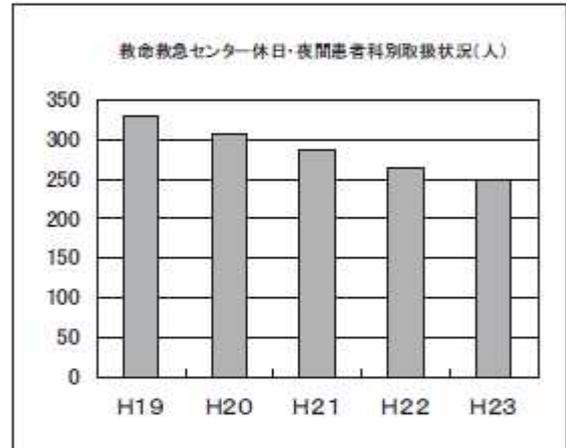
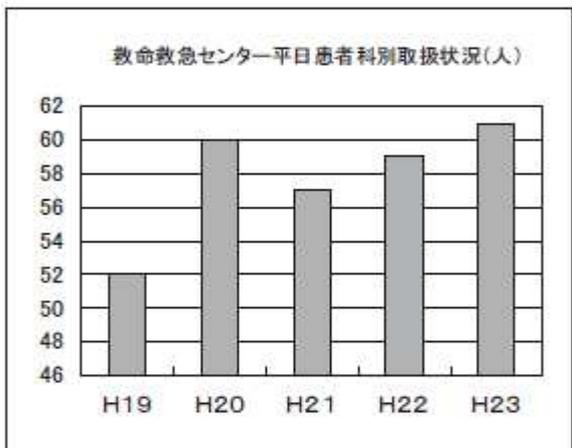
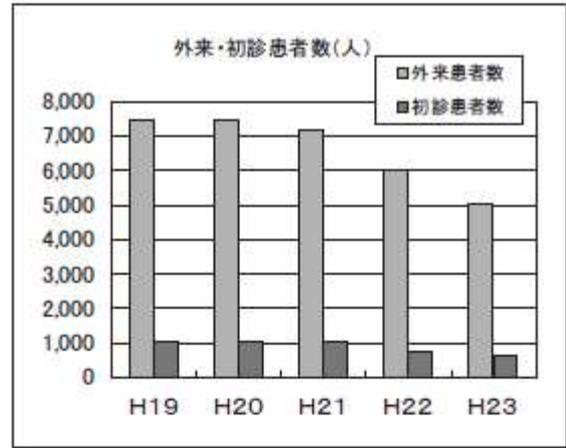
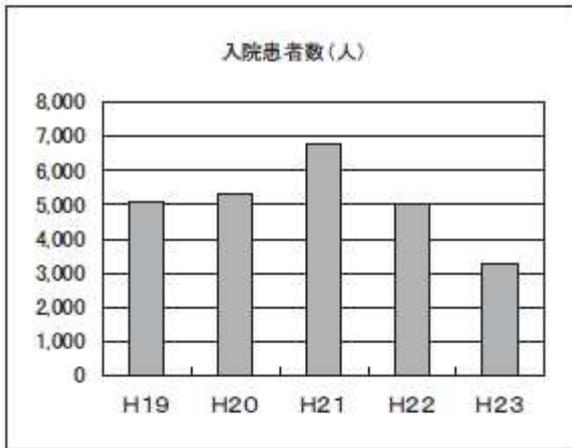
この原発性肺癌82例を分析すると、手術時年齢は平均67.7歳、最高齢が84歳で80歳以上が5人も居ました。最近では手術年齢の上限は特に設けずに、体力と気力から個々に適応を決定するため、80歳を超えてもなお手術される高齢者が徐々に増えつつあります。癌腫の内訳は、腺癌が60例と最多で、扁平上皮癌17例、腺扁平上皮癌2例で、小細胞肺癌、大細胞肺癌、カルチノイド各1例でした。性別では、男性48例に対して女性34例と男性に多く認めましたが、その差は縮まりつつあります。最近多く見られる腺癌に関しては、圧倒的に女性に多い傾向があり(32例/34例:94.1%、対して男性は28例/48例:58.3%)、しかも腺癌では治癒切除が期待できるI期症例は52例(86.7%)と早期に発見できた症例が多かったことも一つの特徴でした。

よく外来で手術の話をする際に、「まだ症状が無いんで大丈夫でしょうか？」と聞かれることがありますが、今回血痰や胸痛といった一般に癌の初発症状と思われがちな症状が出ていた人は13例(15.9%)にすぎません。この中には、風邪などと区別の付かない咳を初発症状とした例が2例含まれています。今回最も多かった腺癌は末梢の肺野に出来ることが多く、レントゲン写真やCT検査で比較的見つけやすいものですが、反面ほとんどの場合症状がありません。咳嗽や軽度発熱といった、非特異的な症状で見過ごされることも多く、固定した症状が出てからでは既に進行していることがほとんどであり、無症状のうちに受ける住民検診や健康診断によるスクリーニングが極めて重要です。今後検診を受けられる方々が増加すれば、早期発見が可能になり、更なる治療成績の改善が期待できます。

現在当科では、毎週定期的に呼吸器内科と合同カンファレンスを行って、個々の症例についての治療方針を検討しており、手術前後も含めて内科と共同で治療にあたっています。

近年手術侵襲の低減を図って胸腔鏡手術が盛んに行われるようになりました。当科では自然気胸のほぼ全例と早期肺癌を対象としていますが、個々の症例にも適応を拡大しつつ、術後の疼痛を減らす目的で硬膜外麻酔の併用や低侵襲な術式を心がけ、根治性を維持しつつ患者さんのQOL(Quality of Life)の向上に努めております。

(成田 久仁夫)



業績

- 学会・研究会発表
- 座長
- 論文

学会・研究会発表

1. 原因不明肺門リンパ節癌の1例
大原啓示、加藤毅人、成田久仁夫
第 28 回日本呼吸器外科学会(全国学会)(別府)2011.5.12～13
2. 胸膜腫瘍と鑑別を要した chronic expanding hematoma の1切除例
加藤毅人、成田久仁夫、大原啓示
第 28 回日本呼吸器外科学会(全国学会)(別府)2011.5.12～13
3. 肺内伏針の1切除例
加藤毅人、成田久仁夫、大原啓示
第 28 回日本呼吸器外科学会(全国学会)(別府)2011.5.12～13
4. 胸腺腫摘出が一過性に有効と思われた難治性口腔内扁平苔癬の1例
直海 晃、成田久仁夫、大原啓示
第 52 回日本肺癌学会(全国学会)(大阪)2011.11.3～4
5. 一酸化窒素(NO)吸入にて酸素化能の改善を見た右肺全摘後重症呼吸不全の1症例
直海 晃 1)、成田久仁夫 1)、石川 寛 1)、中山雅人 1)、加藤真 2)、
心臓血管呼吸器外科 1)、臨床工学部門 2)
静岡県呼吸器外科医会 平成 23 年度夏期例会(地方会)(静岡)2011.9.3

座長

1. 症例検討座長
成田久仁夫
第 21 回三河肺腫瘍研究会(三河安城)2011.11.2

論文

1. 胸腹壁に連なる巨大血管腫の1切除例
加藤毅人、成田久仁夫、大原啓示
日本呼吸器外科学会雑誌 25:383-387, 2011

